エピソード　五十嵐先生に捧ぐ

はじめに…　そうだったのか横高①校史

明治４１年　1908 年４月、県立第四中学校第１回入学式
（入学者９０名、**設立認**可は前年８月）、
初代校長は吉田庫三。６月２０日開校式
…これが開校記念日となった。

大正２年　　改称　県立横須賀中学校　３月の卒業式と同時に
朋友会設立、初代会長は吉田庫三、以後昭和２３年
迄の４０年間、校長が朋友会会長を務めた

昭和２３年 改称 県立横須賀高等学校　（なんと昭和２３年だった）１０月の総会で、以後会員から朋友会会長を選出する旨決定、同月より実施。

昭和２５年　　一部クラスで男女共学実施　　昭和４７年　　全クラス男女共学

②日本の頂点を極めた二人

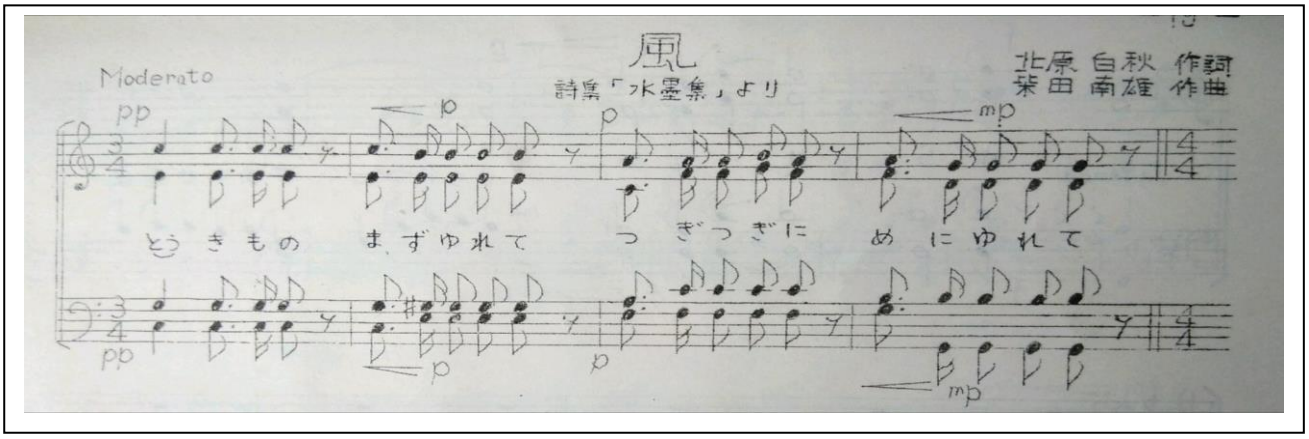
山岡嘉次（昭和４１年９月～４３年９月校長職）
中１２期の朋友会 OB、追浜高校初代校長…というより、中京商業を夏の甲子園大会３連覇(昭和６年～８年､史上唯一)に導いた野球部長として有名。特に３連覇のかかった準決勝は４時間５５分の大熱戦｡エース吉田が一人で投げぬき延長２５回裏１対ゼロで死闘を制した。柔道・剣道・テニスをやり横中野球部創設に加わり、主将・ショートも務めた。ちなみに横中では創立以来野球は「愚連隊のすることだ」と厳禁されており、キャッチボールをしただけで停学になったという。東京商船学校との試合でイレギュラーバウンドのボールが顔面を痛打・前歯を折って気絶したって…本当かなあ？ ライブ CD の張りのある声も頷ける。

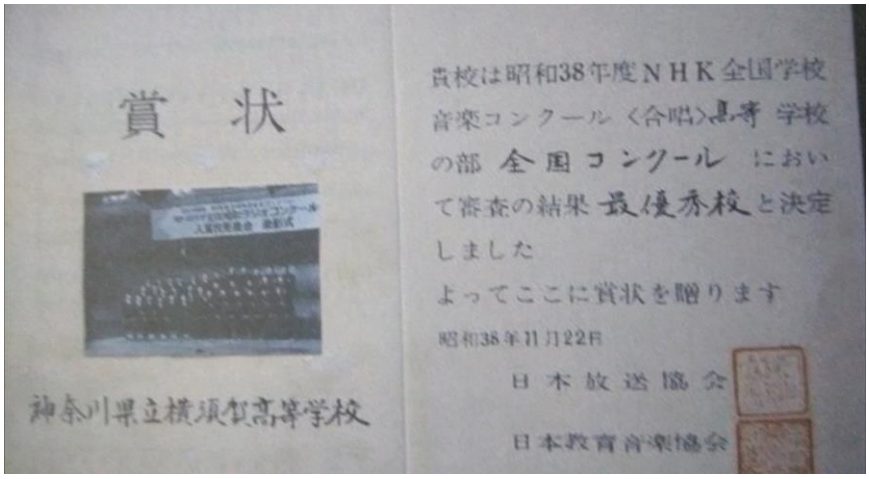
五十嵐光子（昭和２６年～４２年８月在職）
卓越した音楽指導。再三出場した NHK 全国音楽コンクール合唱の部で昭和３６年全国３位、昭和３８年１１月２２日全国優勝を果たす。優勝時の課題曲は「白い雲」自由曲は「風」。特に「風」は万感胸に迫る名曲、なんと素晴らしい選曲。五十嵐先生を偲ぶのにこれ以上の曲は無い。CD「優しき歌・第二柴田南雄作品集の７曲目」に東京混声合唱団（筆者も永年ここの先生にご指導いただきプロの演奏家の感覚や考え方に触れることが出来た）の名演がある。PP やディクレッシェンドが実に美しい演奏、アマゾン等で購入できる。作曲は柴田南雄、歌詞は北原白秋の「水墨集」から。
…『遠きものまづ揺れて次々に目に揺れて、揺れ来たるもの風なりと、思ふもなし我いよよ、揺られ始めぬ…吹く風に揺れそよぐもの目に満ちて翔ける鳥、ただ一羽弧は描けど揺れ揺れてまだ空の中(うち)…輝けど　そは遠し…』…昭和４２年（本合唱コンクールの翌年）８月逝去。このコンクールが最後の晴れ舞台だったのであろうか？五十嵐先生の脳裏を最期によぎったのは、おそらくこの曲だったであろう。卒業後お伺いしたのは１回だけ、大学で合唱をやっていると報告。覚えている唯一の言葉は『そ～う！聴きに行きたいわねえ～』
お墓にも１度しか行かず申し訳ありません。あの時の CD ができましたよ、先生！

あまりに早かったその死、新聞にも報じられた母校での追悼式、みんなで捧げたのはモーツアルトの名曲「アヴェヴェルムコルプス」､指揮は山田茂雄前朋友会長だった。

北原白秋「水墨集」より　風
五十嵐先生全国優勝曲（昭和38年11月22日）

遠きものまづ揺れて　つぎつぎに目に揺れて
揺れ来たるもの風なりと　思ふ間もなし我いよよ　揺られはじめぬ
風吹けば風吹くがまま　我はただ揺られ揺られつ
揺られつつその風をまた　我がうしろ遥かにおくる
吹く風に揺れそよぐもの　目に満ちて翔ける鳥
ただ一羽弧は描けど　揺れ揺れてまだ空の中（うち）
吹く風の道に　驚きやまぬものあり　光　また暗みて
をりふし強く　急に強く　　光　また暗む　すべて秋　今は秋
輝けど　そは遠し　尾花吹く風





五十嵐先生の顔写真は無く、卒業生名簿の教職員群から拡大編集、スナップ写真はこっそり撮って、しまってあったもの。もう時効！

③両雄の共演・前代未聞、特別だったコンクール

山岡（９月着任）・五十嵐(翌年８月逝去)…１年にも満たない出会いの中、共に日本の頂点を極めた名指導者が二人も主導したこのコンクール、そんな豪華な舞台は８組の特別出演が入ったことを除いても２度と無いであろう歴史の大きなＩページ。今思えば、参加者は本当に幸せだった。そしてこの二人の先生の声がふんだんに入っているこのCDは実に貴重な記録になった。

④課題曲「花」は歴史的名曲、日本初の洋式歌曲・合唱曲、やはり先生の特別な思い入れか？

滝廉太郎の運命も数奇極まりない。史上最年少１５歳で東京音楽学校（芸大）合格、首席で卒業。留学先でﾒﾝﾃﾞﾙｽｿﾞｰﾝ設立の名門ﾗｲﾌﾟﾂｨﾋ音楽院に合格。幼少期ピアノ教育を受けていないらしいのに皇后の御前演奏を任され奇才と言われる程の名手。如何に音楽の聖地とはいえ、文部省は何故結核蔓延下のドイツに滝を派遣したのか？「雪」や「鳩」は滝の作品らしいし作詞者もはっきりしているが何故、改ざんされ作者不詳で教科書に載ったのか？殆ど全てが声楽曲なのに遺作「憾み」がピアノ曲なのは何故か？それにしても「憾み」はﾜｸﾞﾅｰのｼﾞｰｸﾌﾘｰﾄを３分間に凝縮したような壮絶・深遠な曲。無念の極みにも聴こえるし昇華・悟りの境地にも聴こえる、2019 年に発見された作曲過程を含む「憾み」の自筆譜、その余白には doctor！doctor！と書いてあったという。

エピソード①五十嵐先生の時間稼ぎ作戦、８組特別出演の謎。

…秋の音楽室、遠い日のかすかな記憶、要旨はこんなだったかなあ？随分時が過ぎた。
…（心配してくれる先生と一番言いたいことをついに言えなかった大井。）先生、もう明かしてもいいよね！５５年間誰にも言えなかったよ。当日の結果がまずまずで救われました。
『大井君　審査結果が出るまでみんなが退屈しないように時間稼ぎしてくれない？』
「ええっ？ウーン…待ち時間て長いんでしょう、そんなに？…。ウーン…じゃあ…そう、６曲やればいいですか？」『なぜ６曲なの？』「コンクールで２曲だから合わせて８曲、８組だから８曲。１曲２曲ではとても間がもちません」『あら、オシャレね！その案』
『でもそれは無謀だわ』『そんなに沢山やったらコンクールの練習時間が減って、８組が圧倒的に不利になっちゃうわよ！それに、その６曲だって、君はきっと易しいのは選ばないでしょう。』（この時、先生は未だ８組が超難曲の自由曲を選ぶと予期していなかったはず。予期すれば６曲の演奏はさせなかったかも、易しい自由曲で余力を残すと予想したのかな？）
「先生、何百人もが退屈しないで済むなら、それでいいんじゃないですか？」
『でもねえ…そんなの誰もやったことないし、それに…クラスのみんなにはどう説明するの？』
「別に…理由なんか言わなくても…　ただ、そうなっちゃった、って言います。わかってくれますよ、みんないいやつだから」『皆をずいぶん信用してるのねえ、まあったく、男の子たちって、そんなものなのかしら？』『まさか８曲全部グシャグシャになったりはしないと思うけど…冒険のほうが好きなのね。』『私は手伝うわけにいかないけど、…じゃあそれでお願いね！』
（部活は受験の邪魔だという親に逆らえず、春に泣く泣く音楽部や音楽連盟の副会長をやめてしまい、本当にごめんなさい、我が人生３大痛恨事の一つ、これで少しは罪滅ぼしできるかと思ったけど、そんなこと照れくさくて言えなかった。）…ひょっとして何かの予感で〝最後のコンクール〟として特別なものにしたかったのだろうかと思われてならない。それにしても、この作戦、先生はなぜ音楽部を使うなど安心安全な道を選ばなかったのか…それは今でもわからない。が、先生とは随分いろんな話をした気がする。というよりよく様々なことを聞かれた、特に２年の頃『どう思う？』『君ならどうする？』、そんな中で多分２年時のコンクールの後、『大井君、今後、合唱コンクールをどうすればいいと思う？』「合唱だけでなく総合的な音楽祭になるといいですね！」というようなやり取りがあったような気もする、むろんそういう構想をお持ちでそういう答えを期待しての問いだったのだろう。もし８組の特別演奏がこのようなことに向けて自分と同じ考えを持つ生徒を使っての先生の〝時間稼ぎ〟という名目での、〝実験〟兼〝既成事実つくり〟だったとしたら…〝次のコンクール〟は合唱に加え、独唱あり・ピアノ演奏有り・室内楽あり…賑やかな祭典に成っていたであろう。この〝横高音楽祭〟実現しなかったのは本当に残念！
いつの日か、誰か、この五十嵐先生の果たせなかった夢を実現してくれることを期待したい。

エピソード②ライブ CD 誕生（コロナが背中を押してくれた）

昨春、９回の引っ越しでもなくならなかった段ボール箱の中のカセット（職場でやっていた合唱団の定期演奏会立ち上げ・東京大会金賞・全国大会銀賞など）に混じってソニーの古いオープンリールがあった。タイトルはなんと「校内合唱コンクール」（クラス会で今もよく話題に上る）。ここにあったのか！内容も入手経緯も覚えていない、

英語の学習用に買ってもらったテープデッキだが音楽の録音に使っていた。（英会話苦手はそのせい？）これが聴ければ次のクラス会の話題になる。コロナ後のクラス会再スタートにいいかもしれない。しかし今時「テープレコーダー」などどこにもないし何か月たっても CD 化はおろか聞くことすらできない。ソニーのテープだからソニーのお客様相談室に頼もうか？年末、何気なく見た「カインズホーム」のチラシで DVD コピーしますとあるのに気づき早速預けた。後日「出来ません」の連絡にがっかり。トボトボ受け取りに出向いたがしかし…ここで幸運が…「あそこの電池交換のコーナーで何かわかるかもしれませんよ、できる業者が見つかるかも」…結果、発注から１か月ほどで CD になった。コロナのおかげ。

エピソード③「君といつまでも」の譜面（いつだったかどうしても思い出せない）

五十嵐先生『大井君、この楽譜をあげましょう。あなたならいつか使うこともあるでしょう。
編曲したのは河辺君、あなた方の先輩よ！（１５期２組河辺岳元先輩）』

（編曲したのは４月とのこと、渡されたのは確かコンクールよりは大分前だから夏休み前後か？）

先生・河辺先輩、素晴らしい編曲譜ありがとうございました！やっと少し活かせました！

尚今回、河辺先輩から経年劣化で判読困難な譜面に替えて新しい譜面を頂くことが出来ました。

エピソード④教え子たち　「それからの途（みち）」「それぞれの途」

・３組のリーダーM.Y.は大学で音楽を専攻、今は音楽教室を開いている。

・４組で「ﾀｳﾍﾞﾙﾄの子守唄」の名演を残したÑ.A.　Y.I.　Y.T.　も大学で音楽の道に進む。

・君といつまでものﾅﾚｰｼｮﾝで会場を沸かせたＳ.M.はﾊﾟｲﾛｯﾄとなり、大空を翔けた。

・当日８組全員が持っていた赤い譜面。Y.M.は全２２ページに及ぶその譜面のほとんどを独力で筆写し、左のような赤い表裏の表紙を作り自費で製本量産して皆に配ってくれた…ニヤニヤしながら…しゃれたデザイン…皆喜んだ、しかし誰も気が付かなかった、よく見るとそのデザイン文字が「Are　you　crazy」と書いてあることを！とはいえ黒い学生服の５０名に５０冊の深紅のファイルはよく映えた。しかし残念ながらそのY.M.は音信不通、本件を伝えようがない。同じく音信不通のN.I.そして軽音楽が好きで合唱も頑張ったH.Y.…どうかこのCDに気付いて連絡くれ！

・クラス１の元気ものだったK.K.の思い出話　一人づつ歌う授業のとき、みんなの予想に反して音程もしどろもどろ、どうにも調子が出ない。すると五十嵐先生すかさず『あら、上がっちゃったのね、じゃ隣の部屋でやりましょ、みんなはここで待っててね』…彼はこの優しくも粋な計らいを今でも忘れられないといい、相変わらず元気にクラス会を盛り上げている。

・最も数奇な運命をたどった一人が８組のT.O.　竹刀にソロバンに将棋にと多才に溢れた彼だったが、なんとオタマジャクシは天敵だった。悪戦苦闘、クラス１番の猛練習で奇跡的に乗り切ったのだが…ここで驚異的な才能の覚醒か？卒業後の消息では大学の合唱団に所属したといい、今はオーケストラでヴァイオリンを弾いている。クラス会では「練習日なんだ」とヴァイオリンケースを背負って現れ、それがなんとも似合っている。

・８組のエースH.S.　その美声を認めた五十嵐先生から声楽家の道を薦められたが、結局普通の大学に進む。今は合唱団で音楽を楽しんでいる。

・８組の責任者で全員合唱や特別演奏も指揮したH.O.は、大学で大合唱団に所属、東京大阪京都等の大ホールでのステージを重ねたが、なんと２年余りで麻雀に明け暮れる毎日となる。しかしやがて職場で発展させた混声合唱団で全日本合唱コンクールに出場、激戦区の東京大会で金賞となり中学時代からのコンクール無敗記録を「７」に伸ばすも、会社から送り出された続く高松市での全国大会で銀賞にとどまり、準優勝に狂喜する団員達の中、ひっそりとリーダー引退の意を固める。　　横高体育館の「あの日」からちょうど１０年の歳月が流れていた。

エピソード⑤名曲「ウ・ボイ」５百年の謎と奇跡、関学OBの奮闘

８組がフィナーレとして特別出演の成否を賭けた、男声合唱のバイブルとも言われるこの曲、（当日は日本語で歌った「進め我が同胞よ」）実は沢山の謎とドラマがあり、１９１９年に日本に伝わって以来、どこの国の何語なのかすらわからず、すべてが解明されたのはなんと１９９２年（平成４年）、実に７０年以上の歳月が経っていた。選曲時は、何かありそうな謎の曲としかわからなかったが、今になってみると、フィナーレになかなか相応しい曲だったのかもしれない。

この曲は男声合唱の名門、関西学院グリークラブ（日本最古の男声合唱団とも言われ、かの山田耕筰も在籍した。２０１０年からだけでも１０年連続１位の全日本合唱コンクール常勝校）が深くかかわっている。奇跡的にこの曲を受け取って以来、百年以上に亘ってこの名曲を守り育ててきたクラブでもある。「ウ・ボイ」の生い立ちからの経過が下記。

１）１５６６年、ウィーン攻略を目指すトルコの大軍がクロアチアのシゲット城を包囲、将兵とその家族４千人が半月余守り抜き、城主ズリーンスキーと決死隊が突撃全滅するも、程なくウィーンからの援軍が到着、クロアチアは祖国防衛、ヨーロッパはイスラム化を免れた。

２）３百年後の１８６６年、クロアチアの作曲家ザイツが、上記をテーマに男声合唱曲、１８７６年に歌劇「ニコラ・シュービッチ・ズリーンスキー」を作曲、そのフィナーレの合唱（最後の突撃場面）が今に至るまで「愛国歌」として大人気となる。この歌劇は日本でいえば、「第九と勧進帳と義経千本桜を合わせたような」国民的行事として定着したらしく、Uチューブには熱狂する聴衆が映っていたが、今はどうなっているのであろうか？

３）１８９９年（明治３２年）、日本最古の男声合唱団といわれる関西学院グリークラブ発足。
４）１９１９年、日本軍を主力とした部隊がシベリアでチェコ軍を救出、チェコ軍の第３船が下関西方で座礁、神戸に回航され修理。関西学院グリークラブの部員、塩路義孝が通訳としてチェコ軍宿舎に出入りするうち、チェコ軍の演奏する曲の素晴らしさに気づき、合同演奏などの付き合いが始まり「ウ・ボイ」等４曲の楽譜をもらい発音の指導などを受ける。このとき、何故チェコ軍がクロアチアの愛国歌を持っていたのか、曲の由来なども不明。
５）そして以後チェコの曲と思い込んだまま４０年以上「ウ・ボイ」は関西学院グリークラブ門外不出の秘蔵曲としてアンコールの定番になるなど愛唱された。
１９３５年の第９回競演合唱祭（現在の全日本合唱コンクール）で、同グリーは自由曲に「ウ・ボイ」を演奏、歌詞が何語かすら解らない謎の曲ではあったが、この頃から
この曲は一気に日本の合唱界に広まった。秘蔵とされた、「各グリークラブ垂涎の譜面」はいつしか流出してしまったのだった。しかし依然として意味不明の謎の曲であった。
６）１９６５年（昭和４０年…横高合唱コンクールの前年）、ニューヨークで第１回世界大学合唱祭開催、ここで奇跡の突破口が開く。　このとき、アジア代表に選ばれたのが
関西学院グリークラブ、昼食会で何気なく「ウ・ボイ」を演奏すると、なんと、ユーゴスラビアのスコピエ大学合唱団がそれに唱和、双方「なんで君たちがこの曲を知ってるんだ」とびっくり。きけば、ユーゴの有名な歌劇の中で歌われている曲だという。
しかしそれ以上はわからず、同合唱祭事務局に調査を依頼し帰国。
７）以後、関西学院グリークラブとそのOB新月会は、１９７２年に同合唱祭事務局から作曲者の情報や歌劇の楽譜、１９７６年には、ユーゴスラビア大使館から、歌劇のレコードやその筋書き、シゲットの戦いなどを解説したパンフレット等を入手、ザグレヴからの留学生の協力も得る等と調査が進み始めた。
８）１９８９年、慶應義塾ワグネルソサィエティ男声合唱団のOBが作曲者ザイツの自筆譜コピーを提供（慶應ワグネルと早稲田・関学・同支社の各グリークラブは東西４大学合唱連盟、通称四連として定期的に演奏会を行うなど交流がある）。ユーゴスラビア作曲者連盟から「イバン・ザイツ生誕１５０年記念合唱曲集（含：「ウ・ボイ」）が届く。譜面の調査は大きく進展、長い間に少しづつ変わってしまった歌詞の復元を目指し、関学グリーOB新月会の「ウ・ボイ」出版チーム発足。しかし、大使館や留学生の協力をもってしても、難解な言語と古い譜面の照合は困難を極めた。この年、関西学院グリークラブが訪欧、クロアチア音楽院で「ウ・ボイ」を演奏、はるか東洋からの奇跡の里帰りと大反響を博す。
９）１９９２年４月（平成４年）、新月会から「ウ・ボイ」決定版・解説出版。随所の歌詞が訂正され、本来の曲想を求めて演奏記号が付加された。シゲット城攻防戦から四百年、作曲から百年、日本伝来から七十年を超える壮大な歴史探索ついに完結。時空を、国境を越えた壮大なロマン、関学グリーOBの情熱と献身は、たかだか５５年前の記録再現に四苦八苦する身からは大層眩しく見える。
１０）残る謎：何故チェコ軍がクロアチアの愛国歌を持っていたのか？チェコ軍の神戸滞在も奇跡なら、軍隊が他国の愛国歌を愛唱するのはもっと奇跡、常識ではあり得ない。そこである人はいう、「この部隊の主力は、かつてクロアチアから戦火を避けてチェコに逃れた人々だったのではないか？彼らは遠く離れても故郷を忘れられなかったのではないか？」
…なかなか説得力とロマンのある説ではある。
１１）日本語歌詞の限界？：８組の演奏は日本語、定評のある歌詞ではあるが、その「清き歌声」とか「優しき乙女子」とか「常に笑む」という歌詞では、原典にある「死ぬ」「地獄から　大軍」「悪魔」「滅ぼす」等という曲想を表現するには無理がある。従ってCDの演奏も日本語歌詞に即した、ゆったりとしたやや平和さえ感じられる標準的な？演奏になっている。それでも拍手や歓声は大きかったが、作曲者が聞いたら「ちょっと違うんだよなあ」というかもしれない。それとも「こんな平和がいいよなあ」と言うだろうか？
日本語の作詞者は「壮絶な突撃死・血みどろの戦い」を「尊い犠牲の後にもたらされた勝利の行進」に昇華させたかったのだろうか？なお、新月会版の演奏指定は
[Allegro con fuoco]…これからすると従来の最も勇壮な演奏でさえ、まだまだ激しさが足りないということになるかもしれない。

１２）第一次世界大戦、故郷から極寒の激戦地に送られながらも、兵士たちが大切に大切に持ち歩いた「ウ・ボイ」、救出された日本の地で芽生えた関学グリーとの友情、そして兵士たちから関学に託された名曲「ウ・ボイ」。もしシゲット城でのクロアチア軍の勇戦が無かったら、チェコ軍の下関沖での座礁がなかったら・その船の修理が関学に近い神戸でなかったら、チェコ軍の兵士たちが宿舎で「ウ・ボイ」を演奏していなかったら、関学がニューヨークに招待されなかったら、ニューヨークのレセプションで関学が何気なく「ウ・ボイ」を歌いださなかったら・そこにユーゴの合唱団が参加していなかったら…
数々の奇跡と幸運に恵まれ、遂にそのルーツを解明し、原典を復元した関学OB諸兄、奇跡と情熱と献身に感謝！　とにかく、数奇な運命の結晶、「ウ・ボイ」とはそんな曲なのだ。

１３）新たなる航海：百年ぶりの大きな曲がり角、「ウ・ボイ」は本来の歌詞になり故郷を取り戻した。生い立ちも歌詞の意味も明確になった以上、今後は曲想も大きく変わっていくであろう。あるべき姿に戻るのは必然とはいえ、我々の世代には〝古い「ウ・ボイ」〟がたいそう懐かしい。それでも〝古い「ウ・ボイ」〟を知らない世代が演奏する、そんな時代はもう、すぐそこに来ているのだろう。

エピソード⑥　幻の「９曲目」未完の夢　自由曲の本命を特別演奏にまわし立ち消え！

８組の演奏は五十嵐先生との打ち合わせの通り全８曲だった。しかしあと１曲、なくなくあきらめた曲があった。それが、京大合唱団初演のあの「組曲　富士山」の第５楽章（原題　宇宙線富士）だった。これを自由曲で歌い、３年間の総決算にするつもりだった。しかし特別演奏をやることになった。この曲ではコンクールが盛り上がりすぎて、特別演奏の時間の感動が薄れてしまいそう、特別演奏の責任は重大、そちらに使おう、秘かにそう考えた。多田武彦、愛称〝タダタケ〟当時『次はタダタケをやるか？』といえば「おう、富士山か！」というのがグリーメンの常景？『平野すれすれ　雨雲屏風　おもたくとざし　その絶端に　いきなりガッと　夕映えの富士　降りそそぐ　翠藍ガラスの　大驟雨』。当日演奏した第２楽章以上に魅力的な名曲。印象的な旋律・絶妙な和音、なにより、こんなに歌い心地のいい曲も珍しい。メドレーで続けてしまえば、同じ組曲内だから言い訳は立つ。本当にやりたかった。みんなもきっと喜んでくれたと思うのだが…。準備は出来ていた、秘かに。余裕が出てから言い出そうと思ったのが間違い、最初から練習すべきだった。課題曲や自由曲の進捗状況が心細い中、もう１曲と言い出せなくなってしまった。何の相談も中間報告もしなかったが、もし相談していたら五十嵐先生は何と言っただろうか？『これ以上無理よ！』？『あなたが決めることよ！』？『悔いの残らないようにね！』？大学１年、大入りの東京文化会館大ホール、富士山はまずまずの出来だったが…、以後この曲をやっていない。後悔は人生の常とはいえ、今でも松井慶太＆早稲田グリーの名演などを聞くたびに後悔があふれる。これぞまさしく未完の夢。全くバカなことをしてしまった。もう１曲やればよかった、あるいは８曲にこだわらず先生に謝り他の曲を減らしてでもやればよかった。しかし、つまるところ、それはたいしたことではないのだろう、なにしろこのことを知る人間はたった一人だけなのだから。

エピソード⑦　１２月２０日の奇跡

昭和４１年のあの日、横高体育館ではなんとも不思議な現象が起きていた。常日頃、自習時間なら３分と経たぬうちに間違いなく教室は喧騒のるつぼ、何度、隣の教室の教師から怒鳴り込まれたことか！たかだか５０名余の教室でもそうなのだ。それが、コンクールの審査結果を待たされ、待ち時間不明、すしずめ状態、教師不在、そこに千余の全校生徒、これで四分五裂、大騒ぎにならない方がおかしい。しかし…体育館の中は求心力が失われることなく、整然かつ熱気あふれる音楽会が進んでいた。感謝すべきは、横高生のなんという協力精神！集中力！
これは奇跡と呼んでもいい。しかしその「タガ」もついに外れる時が来た。最後の全員合唱が終わりかける頃、会場は大騒ぎ、歓声やら胴上げやら、五十嵐先生の片付け指示の絶叫やら、もう誰にも、とめられない。
そこにはいつものちょっと破天荒で賑やかな横高の姿が戻っていた。

おわりに（御礼とお詫び）

古人曰く「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」。永いようで短く、短いようで永い５５年、公私共に人一倍の罪や失敗・後悔がありました。　このコンクールのときも、拍手と歓声・紙吹雪あり胴上げありのにぎやかな祭典だったのに、頭は自クラスのことでいっぱいいっぱい。特別出演のアナウンスももっと適任者に頼めばよかった！他クラスの人や、アナウンサー・指揮や伴奏の人たちと、ろくに挨拶も交流もしないとは！記録も残さないとは！加えてせっかくの録音テープを５５年も死蔵してしまうとは！余人はさておき、私自身がお世話になった全員合唱の伴奏者も思い出せないとは！残念ながら誰に聞いても５５年の歳月の壁は厚く、会場アナウンス担当や伴奏者の多くの名前（　　）が書けなかったことが実に残念、お詫びいたします。いつかこの空欄が埋まればいいのですが…ただ…チェコの兵士たちが何故あの「ウ・ボイ」を大切に持っていたかが謎であるように、このコンクールにも「あれは誰だったのだろう？」等ちょっぴり謎が残る、それもまたロマンなのかも知れない。でも CD を聴いて思い出したら教えていただきたい。いまよみがえる５５年前のタイムカプセル　…遅ればせながらこの CD で少しでも多くの人がお楽しみいただけますように！
ここに改めて旧交を謝し、本企画にご協力いただいた高橋（正）君・嶋津君他、多くの方々に、今こころからそして精一杯の御礼とお詫びを申し上げたい。尚このCD作製にあたり１３期の角田先輩に多大なご尽力を頂きました。また朋友会大竹会長、編曲者の１５期河辺先輩にもお世話になりました。　はるか５０年を超えるあの頃、横高に五十嵐先生を中心とした素晴らしい音楽の花が開いていたことが、いつまでも忘れられませんように！

令和４年２月10日　高１９期８組　三浦史蹟名勝振興会　大井　英章
連絡先（お便り歓迎）　Kafuu07111028@gmail.com
０８０-５４９３-０７１１